これはあなたの母

沢田美喜と混血孤児たち

小坂井 澄

小坂井 澄

これはあなたの母

沢田美喜と混血孤児たち

集英社

こさかい　すみ
一九二九年東京生れ。聖公会神学院、立教大学に学ぶ。集英社退社後、七二年ローマで半年間修道院体験。著書「モルガンお雪」「教皇ヨハネ二十三世」（共訳）「お告げのマリア」

これはあなたの母
沢田美喜と混血孤児たち

一九八二年二月二五日　第一刷発行
一九八三年三月三〇日　第二刷発行

定　価　九八〇円
著　者　小坂井　澄
発行者　堀内末男
発行所　株式会社集英社
〒101　東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
電話　出版部（〇三）二三八―二八四二
販売部（〇三）二三〇―六一七一
印刷所　凸版印刷株式会社

© S. KOSAKAI, Printed in Japan, 1982
0095-772361-3041
検印廃止。落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

目

次

第一章　黒い顔　7
第二章　モナリザ　27
第三章　狂詩曲　49
第四章　海　72
第五章　巷で　93
第六章　心の友　110
第七章　焼跡　127

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第八章　聖餐　144
第九章　結婚　164
第十章　楽園　181
第十一章　母の像　210
第十二章　残照　234
第十三章　志　254
あとがき　284

AD・ブックデザイン／内部　隆
カバー・口絵写真／小沢忠恭

これはあなたの母

沢田美喜と混血孤児たち

イエズスはその母と、愛する弟子がそばに立っているのを見て、母に言われた。
「婦人よ、これはあなたの子」
また、弟子に言われた。
「これはあなたの母」
（ヨハネ福音書）

第一章　黒い顔

その青年と待ち合わせたのは、上野駅のしのばず口だった。住み込みで働いているパン工場が近くなので、勤務の終わる午後五時半すぎという約束であった。

少し待たされて、六時まぎわになったころ、私は雑踏の中に、目を四方に散らせている青年の姿を認めた。「黒い」と聞いていたが、それほどでないのが意外だったが、ひょろりとした長身、彫りの深い顔は、まさしく混血のそれであった。

声を掛け、名乗り合う。初対面のせいか、ちょっとおどおどしている。目が異様に大きく、突き出ているのが印象的だ。肌は浅黒く、私は「やっぱり黒人系だな」とうなずいた。

だが、近所の喫茶店に入って話を聞き始めて「父親はフィリピン人らしい」ということを知った。「らしい」というのは、彼が父親について直接は何も知らないからである。それどころか、母親も知らない。

小島邦男、二十七歳。物心ついたときは、神奈川県大磯のエリザベス・サンダース・ホームにいた。

「後になって父親がフィリピン系だということ、母親は広島のほうにいることを、ホームの先生から聞かされた。でも、もう母親も再婚して子どももいるだろうし、いまとなってはこっちから捜し出そうとは思いませんね」

精一杯突っ放してみせている口調だった。

エリザベス・サンダース・ホームの創立者で園長、「混血児の母」と呼ばれた沢田美喜が、旅先のスペイン、マヨルカ島で急逝してからほぼ半年がすぎていた。

彼女の死後、私がぽつりぽつりと訪ね歩いたその後の混血孤児たちのうち、邦男は十何人目かに当たる。私はすでに最初の印象で、彼らに共通する一種の突っ張り、それと裏腹の孤独を彼のうちにも感じた。

「ママちゃま（と彼らは沢田園長のことを呼ぶ）にはずいぶん怒られた。ぼくは可愛がられたほうじゃないから。でも、恨みなんて。ママちゃまがいなければ、いまのぼくはないんだし、それにサンダース・ホーム出身というのは誇りですよね。だれでも、ホームやママちゃまのこと知ってるもの」

おそらく他の施設出身者には持ちようもあるまいこの「プライド」も、彼らに独特のものだ。

いまのパン工場に勤めて、五年になる。これまで職を三度変えている。これもまた、彼らにほとんど例外なく共通していることである。

混血の、しかも不遇の彼らに対して、職場の条件が悪いということもあろう。しかし、同時に、彼らの側の持久力の乏しさも否定できないように私には思われた。

エリザベス・サンダース・ホーム内の聖ステパノ中学校を卒えた邦男は、ある保母のつてで横浜の塗装店に勤務する。ここを四年半で退職。理由は「シンナーを使う仕事は、体に悪いので」。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

次に、これもホーム職員の紹介で、千葉県四街道の陸上自衛隊に入隊した。しかし、「つまんなくなって」半年しか続かなかった。

自衛隊をやめたとき、大磯の沢田園長に電話をした。報告かたがた、また何か仕事を世話してもらおうという甘い期待があったに違いない。

「そのときのこと忘れない。ママちゃまに〝邦男のばか、ばか、ばか〟といきなり怒鳴られた。〝ママはせっかくあんたを立派な日本人に育てたのに〟って」

答えるひまも与えず、電話は切られた。それが邦男が「ママちゃま」と話した最後だった。

たまたま、小学生時代の保母だった先生が、牧師と結婚して千葉にいた。その古川夫妻が次の仕事が見つかるまで家に置いてくれた。

だが、仕事は自分で捜させた。夫人の元保母、古川敬世(ゆきよ)はこう言っている。

「これまでは沢田先生やホームに全部世話をしてもらっていた。それじゃいけない、と主人とも話したのです」

新聞広告で船橋のパン屋を捜し、住み込みで入った。その後、また新聞広告で、いまのパン工場へ。この転職だけは、先を考えたうえの積極的な行動だった。

エリザベス・サンダース・ホームでは、毎年五月第二日曜日の母の日、卒園生が「ママちゃま」のもとに集まることになっている。といっても、すべての卒園生というわけにはいかない。母の日に集まれるような、とにかく安定した生活をしている者ばかりとは限らないし、たとえ集まれる余裕があり、本人が望んでいても、「ママちゃま」のほうから忌避される場合があるからである。

自衛隊をやめた後の邦男が、後者だった。一度、古川敬世のすすめで花束を持って訪れたが、

受け取ってもらえず、すごすごと帰ってきた。こういう「お出入り禁止」の卒園生が何人もいた。
「でも、後で友達から、本当はママちゃまは花束を喜んでいたと聞いたけれど……」
古川敬世も言う。
「そうだと思いますよ。沢田さんて、そういう方なんです。強さなんでしょうか。うれしくても、簡単には赦せないところがある」
それでも邦男は、毎年、母の日に祝電を打ち続けた。最後の祝電は届かなかった。沢田美喜はそのころ地中海のマヨルカ島で病床にあり、翌日、一九八〇年五月十二日の月曜日、七十八歳の生涯を閉じたからである。
二十代も半ばを越えた孤独な混血の青年にとって「ママちゃま」沢田美喜への思慕は、こがれればこがれるほど遠のいていく片想いにも似たものだったのだろうか。
席を移して、薄暗いバーのカウンターに並んで腰掛けたとき、邦男は私に、左目の下にかすかに残る傷跡を示した。
「小学校六年のとき、ママちゃまに叱られてハイヒールでぶたれたんですよ」
大きな目でこちらの気持ちをうかがうように言う。私は驚かなかった。他にも同じような例を聞いていたからである。
沢田美喜は、子どもたちに対して、ときとして激しい怒りに駆られ、ほうきその他、手近にあるものを手当たりしだいに使って折檻した。保母たちが恐れて、道具になるようなものを隠してしまうと、自分のハイヒールを脱いで、そのヒールで打つ。
ほとんど無意識のうちの行為であるらしい。職員のだれかが腕をとって「ママちゃま！」と制すると、ふっとわれに返るのだ。

邦男は後頭部にも傷があると言った。花壇の花をもぎとったのを見つかって、ほうきで打たれたのだという。

きびしい体罰というのは、沢田美喜にとってひとつの意識的な教育方針だったと思われるふしもある。

三菱三代目の当主、岩崎久弥の長女に生まれた美喜は、岩崎家の厳格な家庭教育のもとに育てられた。

もっとも厳格といっても、それは体罰を伴うものというよりも、土佐以来の岩崎家の質実な生活態度を旨とする日常的なしつけであった。とりわけ、祖母、すなわち三菱の創業者、岩崎弥太郎の未亡人喜勢は、身をもってその範を垂れた人であった。飯粒を一粒でも捨てることなく、集めて乾し飯をつくるようなことを、晩年までやっていた。

美喜がホームの子どもたちはもとより、若い職員たちに対しても、水の出し放し、電気のつけ放しといった無駄を口やかましく戒めたのは、その影響である。

体罰の影響は、むしろ、美喜が外交官沢田廉三と結婚して外国生活を送る中で、英国時代に受けたものであろう。

社交にいとまのない外交官夫人として、学齢に達した三人の息子のしつけを英国人の女性家庭教師に委ねざるをえなかったが、これがいわゆる前世紀の英国風の体罰を伴うかなりきびしいものだった。ヘアーブラシやスリッパで叩かれた思い出を末娘の恵美子も持っている。だが、美喜はこれに反発するよりも、かえって教えられるところがあったらしい。

沢田一家は廉三の赴任先とともに、アルゼンチン、中国、英国、フランス、米国と転々とするが、その中でわずか二年間滞在の英国が、多くの面で美喜に決定的な影響を与えているようだ。

一九三一年九月から三三年九月まで、美喜、三十歳から三十二歳へかけての女盛りの時代だが、そこには彼女の生涯の謎を解く鍵があるような気さえする。

戦後の混血孤児養育という仕事の発想の原点となった孤児院との出会いも、生涯をかけてひたすら深めていったアングリカン・チャーチ（聖公会）の信仰の出発も、みなこの英国時代なのだ。

「ぼくらも小学生のころ、ママにしょっちゅうぶたれたものだ」と述懐するのは、次男の沢田久雄である。柔道の大外刈りで投げ飛ばされたこともあるとか。

男ばかり三人の後に生まれた美喜は、少女時代から男まさりで通っていた。柔道は兄たちにまじっておぼえたものである。ホームの子どもたちの中にも、この柔道の被害をこうむった者は少なからずいる。それどころか、ホームに少年のこそ泥が入ったとき、美喜が胸ぐらをつかまえて壁に押さえつけたという武勇談も伝えられている。

こうした美喜の体罰にせよ、叱り方にせよ、きわめて衝動的なものが多かったのは、それを受けた子どもたちが身にしみて知っていることだ。それでも、美喜は、彼女の過度の体罰を注意したあるチャプレン（ホーム付きの牧師）に、こう答えたといわれる。

「福音書に〝右の手がつまずきになるなら切り捨てよ、全身がゲヘナに行くより体の一部を失うほうがましだ〟と言われてるではありませんか」

牧師は黙って引き下がったそうだが、これはいささか身勝手な曲解というものではないだろうか。

邦男はしきりに「ぼくはママちゃまに嫌われていたほう」と言う。子どもたちに対する美喜の依怙ひいきぶりに関しては、関係者でまず否定する人はいない。衝動的ともいえる体罰と依怙ひ

いきと。彼女の養育の「恣意的」な側面を物語るものであろうか。
だが、それは情熱のほとばしりであり、激しいまでの愛情の爆発だったといえぬこともない。
美喜には、捨てられ、自分がひろいあげた子らひとりひとりというよりも、その全体に対しての激しい独占的な愛情があった。子どもたちが肌の色や特殊な境遇から、世間の冷たい目にさらされればさらされるほど、その愛情はつのった。
また、世の無理解に逆らってあえて開始したこの仕事への情熱と意地があった。それらはいずれも、理性的判断や意志的決断以前のほとんど本能的な衝動だったといえよう。
「恣意的」は本能的と言い換えることもできる。そして、母親の愛情とは、元をたどっていけば、結局は本能に根をおろしたものではないだろうか。
美喜の依怙ひいきと、粗暴な行為に発展する激しさは、多分に性格的なものである。彼女がその性格と闘った跡も、見ることができる。だが、それ以上に、彼女はその性格をひっくるめて、その性格を覆い隠そうともせずに、本能的盲目的に愛情をぶつけていったのではないか。
それは「母親の愛情」である。私はいつのまにか、ごく自然に「母親の」と書いている自分に気がついた。そうだ、沢田美喜の心にあったものは、理性も意志もふくめて、教育者のそれでは断じてなかった。養育事業家、社会福祉家のそれなどでもなかった。
教育者としては、彼女は落第であったという批判を聞く。もちろん、そのこと自体は養護施設や学校の責任者として問題であるが、だいたい教育者と母親とを両立させることは無理なのである。
「ママちゃまがいなかったら、いまのぼくはない」と邦男は言った。「いまになってみれば、もっと叱られたかった」とも。左頬に、後頭部に傷跡を持つ青年の言葉である。

体罰の傷では、ほかにもっと悲惨な例をいくつか聞いた。「よく一つも大事にいたらずにすんだものだ」と当時を振り返って首を振った旧職員もいた。

「たしかに、しばらくは恨んださ」と正直に語ってくれた青年もいる。だが、その彼らが、美喜の急死の報に接したとき、一様に母親を失った嘆きを体験したのである。

「ママちゃまがいなかったら、いまのぼく（あるいは私）はない」

この言葉を、私は何人のエリザベス・サンダース・ホーム出身者から聞いたことだろう。その言葉は「私を生んでくれた人がいなかったら、私はいない」というのとは微妙に違う。いや、それに比べられぬ重味を持つ。

二人の子を持って「ママちゃま」の気持ちがわかるようになったというある女性が、ぽつりと言ったものだ。

「生むだけなら、だれでもできるものね」

母親は生み、かつ育てる者である。だが、その後者の比重が、少なくとも育てられた子らにとって、前者と比べようがないほど重いことを、私はこの取材を通じて思い知らされたのだった。

生みの親についてもちろん関心はあるが、あえて自分から捜そうという気はしないという邦男の言葉は、一概に突っ張りからとばかりはいえないかもしれなかった。もちろん、実の親に対する心情は、同じ卒園生でも、それぞれの人、それぞれの場合によってさまざまである。

バーでアルコールが入ると、邦男の緊張も解けて、口もなめらかになった。これまでの職場で受けた混血ゆえの差別、また、混血と親なしの境遇ゆえ破れた初恋について、訴えるように語った。

横浜の塗装店時代、仕事が終わると、毎晩のように先輩に呼び出されてなぐられた。「顔つき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.